

令和3年度 学校推薦型選抜  
歴史学科 小論文① 出題意図・解答例

【出題意図】

英語の文章の読解を通じ、歴史学を学ぶ中で必要となる基礎的な理解力、思考力、表現力が備わっているかどうかを総合的に判断する。

小論文①では、英和辞書を持ち込み可としており、単語を暗記しているかどうかで得点差がつくようにはしていない。むしろ、単語に関する条件は受験生が同一となるために、文法構造に対する理解や、文章全体の流れを把握する基礎的な能力が問われることになる。また、単語の意味に関していえば、本文全体に即したふさわしい単語の意味を選択し、それらを適切な日本語の文章に表現できるかが問われる。

こうした点に加え、問題文に関わる記述問題を課している。高校時に学んできた歴史に関する知識を利用して、総合的に思考できるかどうか問われる。

1 (1) 【解答例】

フランスは広州港に1660年より折にふれて船舶を派遣し、1728年に商館を開設したけれども、18世紀を通じて貿易は小規模でしかなかった。フランス領事館に国旗が掲揚されたのは、アミアンの和約を締結した1802年からだが、イギリスとふたたび交戦した1803年には、また引き下ろされた。あらためて領事が認められたのは1829年だが、国旗掲揚は1832年まで認められなかった。アメリカはそれまで、イギリス東インド会社の仲介を通じてボストン港を経由していた茶貿易に関わっていたのが、パリ条約締結の翌年の1784年、広州港へ船を直接派遣するようになった。取引はうまくいってその試みが続けられた。アメリカ人商人・水夫が自前の企業を設置し、特権会社の独占という制約から解放され、西洋諸国民のうちほぼアメリカ人だけが四半世紀もの間、享受した中立の立場のおかげで、アメリカの貿易は飛躍的に増加し、まもなく広州の商業界で第2位の地位を占めるようになった。

(2) 【出題の意図】

パリ条約はアメリカ合衆国の独立をイギリスが承認したものであり、アメリカ独立革命はボストン茶会事件からはじまる。そうした史上の大事件とも関わるアメリカ大陸と中国との茶貿易が、合衆国独立前後でどう変わるのか、世界史全体にどのような位置をしめるのか、について、本文の読解をふまえて、適切に理解し、論理的に説明できるかを評価する。

2 (1) 【解答例】

イギリスの景観や経済が作り変えられた産業革命よりも以前、多くの町は基本的に市場町であり、現代にもみられるように、少なくとも郊外と緊密に関わりあっていた。実際のところ、その頃の町と郊外はより密接な相互依存関係にあった。というのも、ある程度まで市場町と市場圏が一つの経済的な単位となっていたからである。市場町は、主として、食品やさまざまな種類の原料との交換を通じて市場圏に商業的・社会的なサービスであったり、家内工業製品であったりを提供する場として存在していた。貿易や産業に特化し、農業地域の持つ資源の規模を越えて町が成長できるかどうか、結局のところ、市場圏の範囲や生産性、そして人口密度に依存していた。それゆえ、過去数世紀における郊外地域への町の影響範囲を復原することは、町の成長を理解するのに有用な鍵となる。

(2) 【出題の意図】

産業革命によって、工場労働者の都市居住が進み、本文にあるような都市・郊外関係段階とは違うフェーズとなった。また人口増加は都市の範囲を拡張させると同時に、資本家層と労働者層といった都市内の階層分化と、階層による居住地区分化を生み出した。本文の理解をふまえて、技術や経済分野にとどまらない産業革命の意味を適切に理解し、論理的に説明できるかを評価する。